

## 生活を広げ、伸びようとする個の育成

一小1「がっこうたんけん——いいにおいのするきょうしゅくしゅつのはみつ」の実践を通して—

福 應 謙 一\*

### I 子どもの世界

#### (1) 子どもをとらえる

入学して間もない頃、放課になると、多くの子どもは遊具のある遊び場へと向かう。必ず、数名の子どもから声がかかり、ともに遊ぶ。滑り棒を平気で下りる子もあれば、今までにない勇気を出して無理をしている子も見られる。一人ひとりの行動に、その子の思いがこめられている。教師にとって、すべての子どもたちの行動が、個をとらえる好い機会である。

授業においても、仲良く遊んだり、秩序正しく遊具を利用したりする機会をもった。子どもたちに、「学校は楽しい所である。」という感じを持たせたかったからである。

ところが、数名の子どもの中から、いつまでも始まらない「勉強」に、ついに不満がもれ始めた。

「先生、今日は勉強しないの？」

「勉強するよ。」

「今日は、挨拶の勉強があるよ。」

「そんなの、勉強じゃないじゃん。」

「いや、とても大切な勉強だよ。」

学校に入学したという自覚をもっている子どもにとって、国語とか算数とかの、いわゆる教科の枠に入っていることでないと勉強だとは思えない。今まで、幼稚園・保育園で学んできたこととは違う何かを学校で学びたいという意識があるからだ

ろう。今までに習っていない字を覚えたり、計算したりすることが勉強であり、またそれを学ぶことが楽しみなようである。

(4月10日 教師メモ)

#### (2) 子どもの世界を広げる

子どもたちは、小学校へ入学したという自覚のもと、新しいことを知りたい、覚えたいという要求を高めていった。それは、ノートの上で、また新しい知識の上でのことであるが、活動する生活空間においても、今あるままで満足することなく、より外へという動きを示していた。

このような、生活の場をより広げようとする動きを大切にしながら、校舎内外を巡回して、会った人に話を聞いたり、自然にある草花・昆虫などで遊んだりした。子どもにとって、「勉強している。」という意識はないだろうが、多くの事象、事物とふれあうことこそ真の学習であろうと考えて、4月の授業の中心にすえた。

校舎内外2回に分けて、学級全体で見学した。それまで、活動の範囲が限られていた子どもも、新しい場所、事物、仲間を知ると、これまでの生活圏を破って、外へと広げていく。興味・関心の対象もたいへん大きくなる。未知のことがあることに気付くことは、生活するうえで大きな魅力となる。さらに知りたい、もっと行ってみたいという気持ちだが、子どもたちのなかに大きく育ってくればと考えて、単元『がっこうたんけんをしよう』を設定した。

\*愛知教育大学附属岡崎小学校

入学して間もない頃の子どもにとって、社会とか理科という、教科の枠の意識はほとんどない。そこで、より見聞を広め、生活を拡大し、自己の生活とのつながりに気付くこと、学校生活におけるそれぞれの持つ役割等をとらえることをねらいにおいた。

## II 子どもの伸びようとする芽

### (1) 「たんけん」に出かける

社会とも理科とも言わずに始めた「がっこうたんけん」は、子どもたちのより多く知りたいという好奇心と呼応して、学級全体での関心となっていた。入学したての子どもたちであるから、学校内には知らない所、分からないことが多く、毎日が新たな発見の日々である。そこで、子どもたちの実態に合わせ、校内において、より多くのことを知ろう、いろいろな人がいることをつかもうとする子どもを育成したいと考えた。子どもたちが、関心のある所に自由に行っては、見聞を広められるような授業を設定した。少し分かるとおもしろさが増し、放課にも「探検に出かける」という子がでてきた。

- ・姉妹学級のお兄さん、お姉さんは何をしているかな。先生、6年生の部屋に行ってきたいい?
- ・お姉ちゃんの教室に行き、見てきたい。
- ・体育館には、マークがいっぱいあったよ。
- ・おやまの所がおもしろい。
- ・先生、鳥のうち、見つけたよ。
- ・給食室はいいにおいがする。

(放課時の子どもの声)

このような動きを大切にしながら、「学校探検」を継続してきた。自分の探検場所は自分で決め、ときには数人のグループになって出かけた。見てきたこと、つかんだ事実は絵を中心に表現することにした。絵のなかにその子の驚きや発見を表現するが、難しいところは、お話で補うことにした。

子どもとの対話を通して、感動を把握するように努めた。

(2) 「もっとくわしくしらべたいこと」がある  
校内の各所に出かける子どもたちであるが、「学校探検」を重ねるうちに、さらにくわしく調べたいことが限られてきた。特に、給食室については、「よいにおい」に引き付けられながら、分からないの多い所として、多くの子どもが関心をもった。

「いいにおいがする。」と言っては、給食室の前で立ち止まる子どもたち。下校時(第3時限終了後)の給食室前は1年生でいっぱい。「いいにおい」を感じながら、一斉下校の整列場所へ移動していく。「おなかがグーグー言ってきたまらない。」という子どもたちから、「いつから給食が始まるの?」という質問がかえってくる。

(4月22日 教師メモ)

その他、姉妹学級(6の3)や兄姉のいる部屋も興味の対象となる。即ち、そこでは、いっしょに遊んでくれる、頼りになる人がいるからである。子どもたちの自主的な「がっこうたんけん」後に、見学先を絵に描かせた。それを内容別に分類したところ、次のようになった。

#### もっとくわしく調べたいこと

・給食室	10名	・姉妹学級	8名
・兄姉の学級	{ 2年…1 3年…6 } { 4年…2 5年…2 }	計11名	
・学級の畑		5名	・運動場
・隣の資料室	2名	・副校長室	1名

(4月27日 学習記録より調査)

給食室の絵を描いた子については、その絵の中にどのような要素が含まれているか、さらにくわしく調べて表にまとめた。

#### 給食室の絵の内容

A子	煙突	網戸	見学者2人	雲	蝶
N男	煙突	網戸			
B子	煙突	煙	網戸	見学者3人	
E子	網戸	見学者3人	太陽	たんぽぽ	

C子 煙突 網戸 太陽  
 K男 チーズ スプーン (中の様子)  
 M男 網戸 買物の様子  
 S男 ごみバケツ (パン入り) 扇風機  
 T子 フライパン 鍋 やかん  
 働くおばさん…三角きん 白衣  
 H子 鍋を回すおばさん 台 バケツ

(4月27日 学習記録より調査)

網戸越しの給食室の見学であるため、外の様子しかとらえていない子もあれば、くわしく中の様子についてとらえている子もある。数名の者が働く人にまで注目しているが、大部分はそこにある事物を描くにとどまっている。

(3) 「みつけたよ」をかきたい

興味の対象が明確になってきた一方、さらに知りたい、見たいという願いを持つ子も多くみられた。そこで、その子どもたちの気付きの目を大切に、うまく学習に結びつけたいという意図のもとに、「みつけたよ」の記録を始めた。学校内外の生活で、何か見つけたこと、気付いたことを記録して、みんなに紹介しようとするものである。

その第1号はテントウムシであった。学習当初から、社会と理科を合わせたかたちの、「がっこうたんけん」をしてきているので、双方の学習に結

びつく「みつけたよ」である。内容の多くは、虫や草花に関するものである。理科の学習で、虫と遊ぼう、身近な所にある草花を学習したので、当然の結果である。

そんななかにあつて、2人の子は、「学校の中には、みんなで何人の先生がいるか」ということを問題にして、校内を歩き回って人数を確認した。「1年生は3学級だから、6年生までで18人。その他にも、まだ先生がいる。」ということで、先生探検に出かけた。養護の先生、校長先生、副校長先生がいることに気付き21人となった。この2人の子は、全学級に行き、教室数を数えた。この足でかせぐうちに、今まで知らなかったことにも関心が向き、新たな気付きがうまれた。

III 子どもを鍛える時と場

(1) 給食が始まる

5月9日、入学して1カ月後、給食が開始された。多くの子どもたちにとって、待ちに待った給食である。これまでは、「いいにおい」だけの、空腹のままの下校であった。12時すこし過ぎに下校する子どもたちが家に着くのは、午後1時前後である。

そんなわけで、「がっこうたんけん」で、いろいろな方面に向いている子どもたちの目が、必ずや



給食に集中してくると考えていたところ、その通りになった。

実際に、給食の初日、子どもたちの生活日記は、多くの子がその印象をまとめた。

はじめてきゅうしょくをたべました。いちばんにたべました。おいしかったです。6ねんせいのひとがくばってくれました。

いつもきゅうしょくがなかったときは、いつもおなかがすきました。

(5月9日 T男の生活日記)

きょう、はじめてきゅうしょくがはじまった。いちばんおいしかったのは、にくじゃがです。うちのよりずっとおいしかったです。ごはんがもうすこしあったかいほうがいいです。のこさずにぜんぶたべられました。

(5月9日 D子の生活日記)

ギャオー、トマトだ。すいのきれいなトマトがさいしょのきゅうしょくにでました。くちにいたらすっぱかったです。だから、すぐくへんなかおをしてたべました。

(5月9日 S子の生活日記)

このように、それまで拡散していた子どもたちの関心が、次第に給食に集中してきた。給食室への関心が高まると、気になるところとして、おのずとそれまでとは違ったとらえをするようになる。次第に中に入って調べたい所として、意欲的なひとり調べが期待できるようになる。

## (2) 給食室が気になる

給食室には、4人の炊事婦さんと1人の栄養士さんがいる。そこに入り出るパン屋さん、八百屋さん、肉屋さんなど多くの業者がある。また、なんとといっても、その給食を食べる720人の児童、そして30人余りの職員がある。

給食をつくる場所としての給食室のとらえに加えて、それを食べる児童・職員にも子どもたちの関心の広がりを持たせることができる。もちろん、各家庭とは違い、750人という多くの給食を作るに

は、大量をこなすだけの施設・設備がいる。どの道具ひとつをとっても、大量のものを作るところから発している。単に、いいにおいのする所といった発想から生まれた単元であるが、中身を考えると幅広いものがあり、追究のおもしろみも十分ある。考えてみれば、煙突から出る「いいにおい」は、大量に作るがゆえに出るものである。給食室の追究が核になって、学校全体のことがらを広げることができ、さらには自分自身の生活に密着する関心事であることから、大いに子どもたちを鍛える時と場が考えられることを実感しながら、単元の追究に入った。

しゃかいのべんきょう

きょう、しゃかいのべんきょうをして、2じかんもやっていました。1年から6年まで、ちかちゃん、子どものにんずうをかぞえてきて、せんせいは、26人でした。あとで、さいんをしてもらいました。くさかわせんせいも、こうちょうせんせいもさいんをかいてくれました。しゃかいのべんきょうは、とてもたのしくてよかったです。せんせいも子どものかずをあわせて、750人でした。

(5月16日 N子の生活日記)

今まで、あまり動きのなかった子ども、学校の中にいる人にサインをしてもらうという活動をきっかけにして動き始めた。行動すること、活動することのおもしろさがつかめてきたようである。

人数の把握を通して、一方では追究の方向を広げながら、また一方では、給食への焦点化も考えた。つまり、人数の把握にしても、それはつねに給食室の追究に端を発していることを念頭におかせた。

## IV ひとり調べ・かわり合いにおける教師支援

### (1) 一人ひとりと対話をする

この単元の実践では、給食室内の見学を4回行った。それぞれ目的が異なる。いずれの場合も、

見学後に各自のとらえたことがらをまとめる時間をとった。そのまとめを教師に提出する際に、内容について個々の子どもとの対話の時間を大切にしました。

子どものひとり調べは、単なる気付きを絵や文に表現することが多い。書いてあることは、子どものとらえた事実であっても、その子のものとして消化していないのである。

そこで、子どもたちが、自分の力でとらえた事実をより確かなものにするために、教師との対話の必要性を感じた。つまり、描いた絵を中心に話を進めると、子どもが自分自身の絵について話すことで、とらえた事実の意味付けができる。言い換えれば、自信をもって発言できるようになるのである。1年生の初期の段階では、是非とも必要であることを痛感した。また、絵について話す中で、絵に表現されていない周辺部のことがらについても雄弁に語るようになる。それが、自分の思いを語ることにつながると考えた。40名に及ぶ児童との対話には、実に膨大な時間をとるが、授業中だけでなく放課などもうまく利用して、時間を確保した。

(2) 「いいにおいのするきゅうしょくしつ」を追究する

ア 単元を構想し直す

3回目の見学を終えた後、それぞれのつかんだ事実や気付いた点を記録した。その頃になると、1年生なりに自分の追究問題を持ち、それについてのひとり調べが目立つようになる。

子どもの記録を座席表に位置付けて、個々のとらえや全体の傾向を把握する。それをもとに単元を構想し直していく。(単元構想図一次ページ)

イ 鍋に注目する

3回の見学を経て、個々の子どもの「ひとり調べ」をもとにした「かかわり合い」の授業を設定した。第一発言者が次のように述べた。

C おばさんたちがね、760人のごちそうを作っているのがすごいなと思った。

初めからまとまった意見が出されたので、初歩的な内容に戻すために、次の2つの意見を引き出した。

C 給食室で鍋を見ました。

C うんとね、鍋ね、2回目か1回目か忘れたんだけどね、動かしちゃったらね、そのまま動いたままだった、鍋が。

鍋の話ならば、どの子どもにも見学時の共通の経験があり、それぞれの持つものを出せると考えたからである。

C あのね、鍋の中にね、てんぷらが入っていてエビさんの中にチーズが入っていた。

C 鍋の中にね、エビフライのね、ちょっと小さい穴があつてね、そこからチーズが見えた。

C あのね、なんかね、鍋の中に入れてね、鍋がいいにおいがしたの。

C 油のにおいがしたの。

油のにおいの話がさらに発展し、チーズのにおい、フライのにおいなどが出され、給食室のいいにおいの秘密がこのあたりにありそうだということになった。

同じ鍋の話でも、方向転換がみられたのは、次の発言による。この発言がきっかけになり、鍋の扱いについて話し合われた。

「あのね、鍋ね、鍋ね、あのね、フライにするときね、使うって、知らなかった。」 (H子)

とても大きい鍋ゆえに、使用後はどのように扱う、また次に使うのに都合よくしているかというのである。

C 違うものを作るときにね、まだね、違うものにおいが着いちゃうからね。ふいてから使う。

T これはちょっと違う考えだね。はい、鍋をふく。ふうん。これは和幸くんが見たお話ですね。

C おばさんが、鍋とか使ったあと、ふいていた。

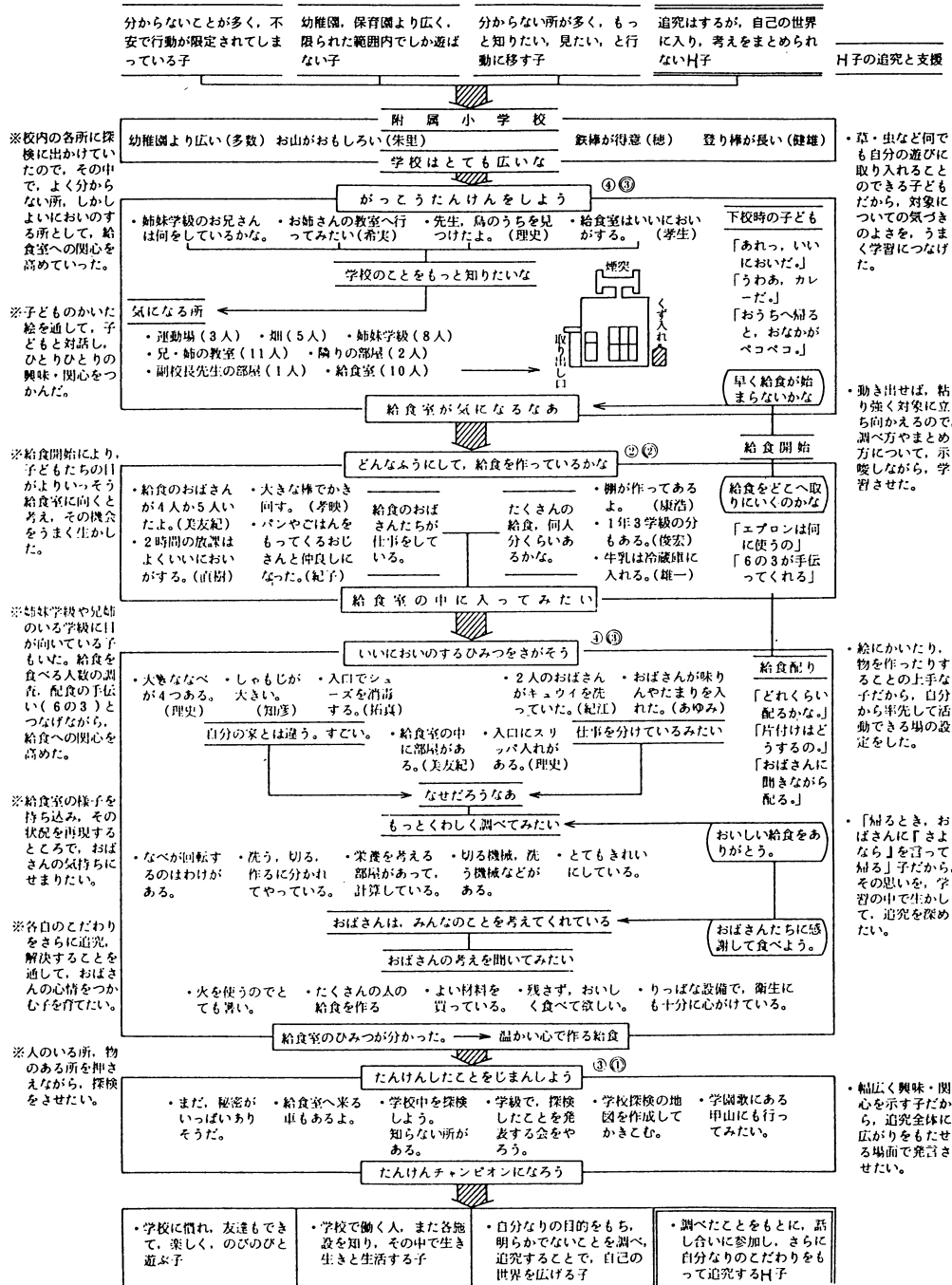
T ふいていた。よく見てたね。

# 1年社会科「がっこうたんけんをしよう

## —— いいにおいのするきゅうしょくしつひみつ ——

第二次単元構想図（12 / 22完了時） ○ひとり調べ ◎かかわり合い

福 應 謙



C あのね、お鍋ね、とれないかもしれないから洗わないかもしれない。

大人の常識で考えれば、「洗わない」ということは考えられないが、子どもたちは、大きいゆえに洗わないと考えたり、ふくのを見た事実からふきとっていると思ったりしている。そこで、この3つの考え方を全体の子どもに投げかけた。

T 洗わないかもしれない。ふくということと洗うということ、洗わないかもしれない。みんなどう思うかな。

C あのね、洗わないとね、他の物を作るときにね、何か変なのがついとるもので、混ざっちゃう。

T それでは洗うの？

C 洗うかなんか、きれいにすると思う。

C (洗う、洗わないなど、多くのつぶやき)

C 洗ってから使うだよ。

C あのね、前ね、キュウイね、洗ってたからね、洗うと思う。

C あのね、フライねに使った後ね、油がね、よくあるから、洗わないと思う。

T (油を使うことが)よくあるから、洗わないでそのままにしておくということだね。

C あのね、いろんな物ね、ご飯とかね、わたしたちが食べたものね、洗ったりするからね、洗うと思う。

C (口々に)クエスジョン、クエスジョン。ハテナマーク、ハテナマーク。

C また、今度探検してさあ。探検マークにしちゃえばいい。

T よし、探検マークにしよう。これはちょっと残しておいて、探検することにしよう。

子どもたちの発想は、実に豊かである。鍋が大きいから洗えないという考え、さらには、ふいてきれいにするだろうという考えが出された。ふかないという考えは少数派だが貴重である。油をよく使うから洗わないという考えを引き出すことができた。逆に、洗うと考える子は、味が混ざって

しまうとか、キュウイを洗っていた、ご飯を食べたものを洗うなど、これまで学習したこと、生活経験でえたことをもとに考えだしたものである。

結局、明らかにできなかったので、今後のひとり調べにまわすことにした。それがまた、子どもの追究意欲となって持続していくものと考えた。

ウ シャもじの使い方はどうだったか

鍋に注目しだした頃から、子どもたちの活動はいっそう活発になった。後半の盛り上がりは、次の発言からである。

えとね、1回目から2回目に分かんけどね、おばさんたちが、味噌や醤油や変なものを入れていた。

そこで、用意していた調味料のビンを出して、発言したT男にその様子を再現させた。実物を使うと、子どもたちの集中力もいちだんと高まる。さらに、おばさんの動きについて、子どもの発言を引き出し実物のしゃもじを使つての動作化を続けた。子どもの身長より長いしゃもじは重く、思うにまかせない。しかも、回し方について、いろいろな意見が飛び交い、多くの子が実演を繰り返すところとなった。とらえの違いがあることは、それだけ仕事の様子をよく見ていたことでもある。ここでも疑問として残すことになった。

この時期の1年生の子どもが、1時限の間、話し合いを続けることは無理である。動作化を取り入れて、具体的に話し合うことの必要性を感じた次第である。

## V 子どもの活動を保障

かかわり合いで生じた新たな疑問は、さらに、次への追究につながる。子どもたちの、「探検マークにしよう」「ハテナマークにしよう」として残された疑問は解決してやりたい。それが、子どもの活動を保障してやることにもつながると考える。

そこで、4回目の見学は、時間的にゆとりのあ

る土曜日を選んだ。機械を動かしたり、鍋にさわったりして、興味・関心を持続しながら疑問を解決していった。

そんな中に、気になる子・H子（いわゆる抽出児）の姿があった。自らしゃもじを握り鍋の水をかき回したり、おばさんに質問したりした。どちらかというと、独自の世界に浸り込むことの多かったH子であったが、給食室の追究を通して、自分なりの考えを固め、さらに切り開いていこうとする姿が見られた。

ここでは、気になる子・H子を中心に述べる。「おばさんに『さよなら』を言って帰る。おばさんがいない時は、機械に『さよなら』を言って帰るんだよ」というH子は、ひとつのことに集中し出すと、徹底的にのめりこむタイプに成長してきた。生活日記にもその様子がうかがえる。さらに、それに加えて、友達の様子も書き加えられるようになってきた。

#### バッタ

きょう、のりえちゃんとプールをみにいったら、くさに小さなバッタを見つけました。1の1のちかだひろこちゃんにバッタをあげたら、ありのじっけんにつかっ、バッタはしんじやいました。かわいそうだとおもいました。

(6月14日 H子の生活日記)

#### ともだち

きょう、みづきちゃんがきました。うちへきました。ようこちゃんもきました。

#### (ほかのこと)

しゅうがくりょうこうからおねえちゃんがかえってきた。

(6月25日 H子の生活日記)

#### がっこう

きょう、がっこうへいきました。わたしがすきなしゃかいのべんきょうがありました。せんせいが、「これできゅうしょくのべんきょうはおわるか

もしれないよ。」といました。

こんどはどんなしゃかいのべんきょうをするのかな。

(6月28日 H子の生活日記)

#### きゅうしょくのおばさん

きょう、おてらにいったらきゅうしょくのおばさんがいました。「だれだ」とおもったら、きゅうしょくのおばさんでした。

(7月1日 H子の生活日記)

このように、「がっこうたんけん」の追究は、単に学校の様子を知ることだけでなく、学校の中にいる人、友達とふれあう好い機会となった。これからの学校生活をする上での貴重な経験となった。

長く続けた「がっこうたんけん」の結末として、「たんけんちゃんびおんたいかい」を開くことになった。それまでに集めた「みつけたよ」に加えて、さらにひとり調べの時間を確保して、「みつけたよ」を書き足した。その際、どの子もH子の発案した「たんけんマーク」を持って出かけた。



H子のたんけんマーク

7月ともなると、子どもたちは大いに歩き回る。音楽室あり、会議室あり、理科室あり。さらに、学校北のアパッチ山へと広げた。

そして、校外へ出て、近くの甲山公園へも行って調べたいという動きになった。

#### 謝 辞

社会科教育について、日頃から貴重な御指導をいただいている松井貞雄先生に厚く御礼申し上げます。